地下鉄烏丸線の発掘調査

元烏丸線遺跡調査会
元京都市考古資料館館長　永田信一

はじめに

地下鉄烏丸線の開業から 40 周年の節目の年を迎えた。地下鉄建設にともなう遺跡発掘は 1974 年に開始され、都市遺跡の先駆的な発掘調査になり、重層する京都の遺跡の特性を明らかにした。当初の発掘調査は平安京の条坊制を明らかにすることが主目的であったが、平安京の条坊に限らず、平安京以前の遺跡や平安時代以後の遺跡も多数発見され、各時代にわたっての遺跡調査が行われた。条坊復元の定点になる平安京の街路の発見や織田信長が上洛した折に足利義昭のために築城したという「旧二条城」の濠の検出や江戸時代の町家からの遺物の出土など、様々な京都の歴史と直接繋がる成果が得られた。

発掘調査の成果は、地上の文化財に限らず、地下に眠る埋蔵文化財への市民の関心を高めることとなり、古都京都の歴史像を深めた。さらに全国の都市遺跡にも影響を与え、博多や堺・大坂や江戸など近世遺跡の発掘調査が盛んに進められるようになった。

今回の講座では、遺跡調査に至る経緯や調査法、調査で明らかとなった主要な成果、注目された発見遺物などを中心に地下鉄烏丸線の発掘調査の成果を様々なエピソードなどを交えながら紹介したい。

経緯

市街地再開発にともなう埋蔵文化財調査

下水道工事下の遺物収集。坂東善平氏ら有志 10 名「平安京内で行われた土木工事による遺物出土表」1969 年

日本考古学協会大会（平安博物館）「協会解体」を訴え学生乱入 1969 年 10 月

地下鉄建設に伴う埋蔵文化財調査について協議がはじまる。1970 年 3 月

京都市文化観光局に文化財保護課が誕生。1970 年 4 月

京都市文化財保護課に埋蔵文化財技師就任。1971 年 4 月

京都市文化財保護課、地下鉄建設に伴う埋蔵文化財調査計画案を提出 1971 年 10 月

京都市遺跡地図公刊。平安京全域が埋蔵文化財包蔵地となる。1972 年 11 月

京都市、設立準備会で京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会の設置を決める。1973 年 12 月

京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会発足。1974 年 1 月

東京国立博物館にて特別展覧「日本出土の中国陶磁」が開催される。1975 年 6 ～ 7 月

（財）京都市埋蔵文化財研究所が設立される。1976 年 11 月

調査法

市街地における調査法

「点から線へ、線から面へ」田辺昭三・吉川義彦氏が測量基準点の設置を主張。1975 年 10 月

「平安京を中心とした京都市域の埋蔵文化財発掘調査の記録方法の改善について」『京都市文化観光資源調査会報告書』田中琢・田辺昭三。国土直角座標系に結び付く記録方法。1977 年 3 月

土木工事の適用

「調査区の安全工事」鋼矢板の使用、「掘削と廃土」重機とダンプカー・ベルトコンベアの使用、「埋戻しと路面復旧」真砂土、アスファルトの搬入・転圧

＊排気ガス対策。

発掘調査の成果

遺跡の発見

平安京以前の遺跡

「植物園北遺跡」：分布調査による遺跡発見。

＊スグキ菜畑の分布調査。中世陶器片の発見。

「烏丸綾小路遺跡」：試掘調査による弥生後期の遺跡発見。

＊平安京内の大規模弥生集落。

「内膳町遺跡」：鴨川流域の弥生前期遺跡の検出。

平安時代の遺跡

平安京街路の検出

「北小路」・「七条坊門小路」・「楊梅小路」・「六条大路」・「烏丸小路」等、重層する礫敷路面と側溝の検出。

中世の遺跡

「東本願寺前古墓群」：集石墓（河原石）・木棺墓（六文銭）・蔵骨器（須恵器・輸入陶磁器・瓦器）・土師器埋納墓の発見。

＊東本願寺の爆破事件（闇の土蜘蛛）。

近世の遺跡

「旧二条城」:イエズス会宣教師ルイス・フロイス『日本史』の記載。織田信長による築城。多量の石造物。

＊刀傷がある頭骨。

＊エリザベス女王・フォード大統領の来訪。

「近世町家」：石組井戸の検出と陶磁器の出土。

＊清水六兵衛の作品。

遺物の発見

各時代の多彩な土器、陶磁器

「緑釉・灰釉陶器」、「輸入陶磁器」、「桃山茶陶」等、都市民の器。

＊完形双魚文の青磁盤の出土。

各時代の木製品・石製品

「荷札」、「下駄」、「猿面硯」「石製鍋」等、都市民の生活。

平安時代後期瓦の集中出土。烏丸六条附近の貴族邸宅の廃棄瓦。

地質学との連携

「鴨川付け替え説」船岡山の岩盤。

＊烏丸通上立売の曲がったＨ鋼

「京都盆地の自然環境」横山卓雄『平安京提要』1994 年 6 月

報告書の発行

『平安京関係遺跡発掘調査概報－京都市高速鉄道烏丸線内遺跡発掘調査－』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会　1975 年

『埋もれた京都－地下鉄烏丸線内の遺跡調査－』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会　1976 年

『京都市高速鉄道烏丸線内　遺跡調査年報Ⅰ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会　1980 年

『京都市高速鉄道烏丸線内　遺跡調査年報Ⅱ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会　1981 年

『京都市高速鉄道烏丸線内　遺跡調査年報Ⅲ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会　1982 年

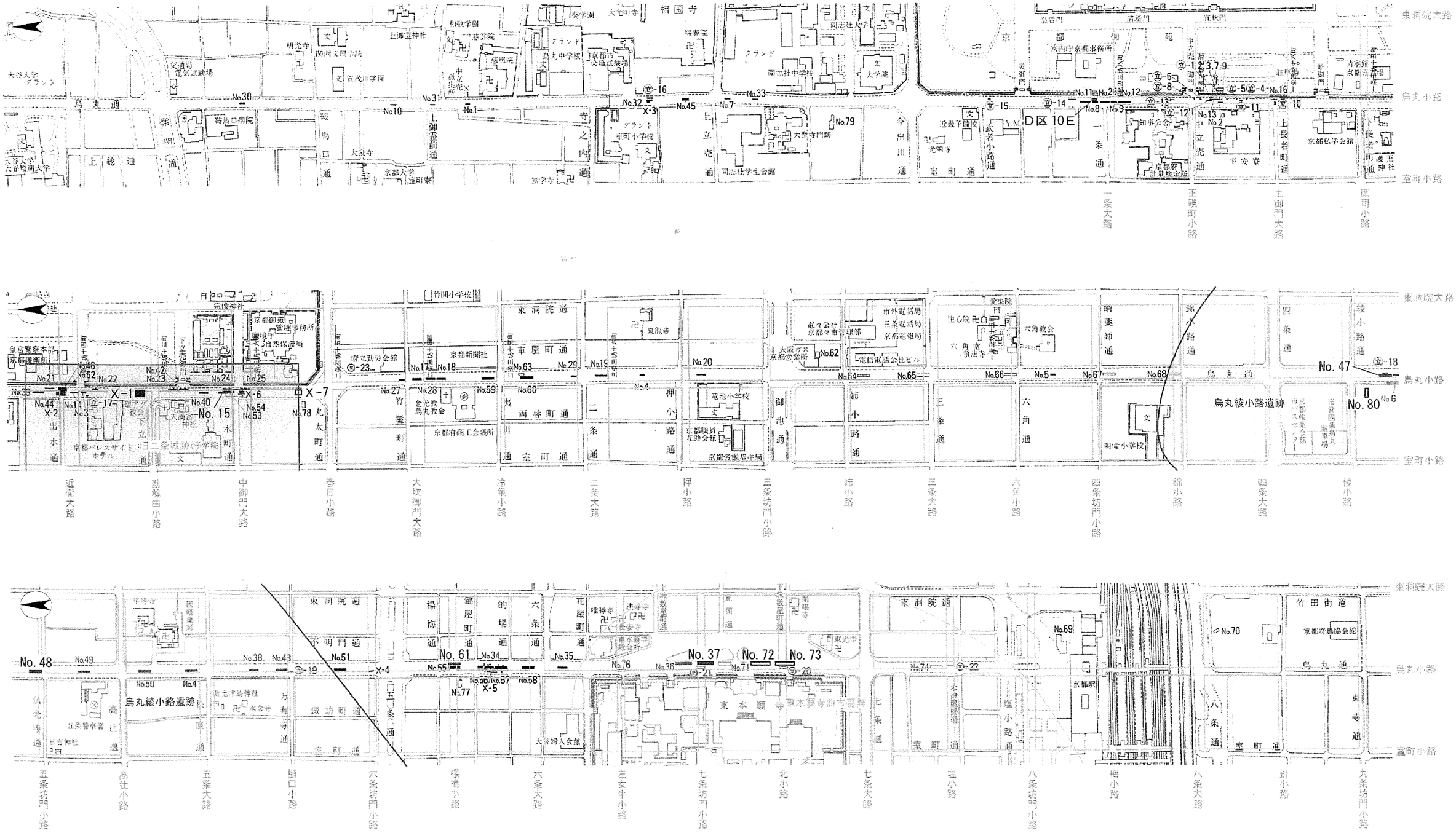
遺跡・遺物の保存と活用

「旧二条城」石垣の現地保存・移築保存

出土遺物の展示

洛西竹林公園での石造物の展示・京都市考古資料館での展示・地下鉄烏丸御池駅での展示

資料2



企画陳列で紹介した調査区

1974 ～ 1976 年度調査地点

1977・1978 年度調査地点

立会調査地点 ⓐ

地下鉄烏丸線調査区配置図

埋もれた京都

——地下鉄烏丸線内の遺跡調査——

1976年11月

京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会

埋もれた京都

——地下鉄烏丸線内の遺跡調査——

1976年11月5日

編集・発行　京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会

烏丸線内遺跡調査会

平安京は平城京とならび、わが国最大の都であり、しかも近年まで首都として存続し、現在も十大都市のひとつとして栄えている。高速鉄道烏丸線（地下鉄）は、オープンカット工法により、烏丸通りを掘り下げ、この平安京遺跡を縦断することになった。それは同時に平安京を事前に調査し、千年の都の歴史を明らかにできる絶好の機会でもあった。

ところが、現在の烏丸通りは、1日4万台の車が通り、沿線は商社、商店がたち並ぶビジネス街で、往来の激しい幹線道路になっている。そこを発掘調査するには、当然多くの問題や困難が予想された。

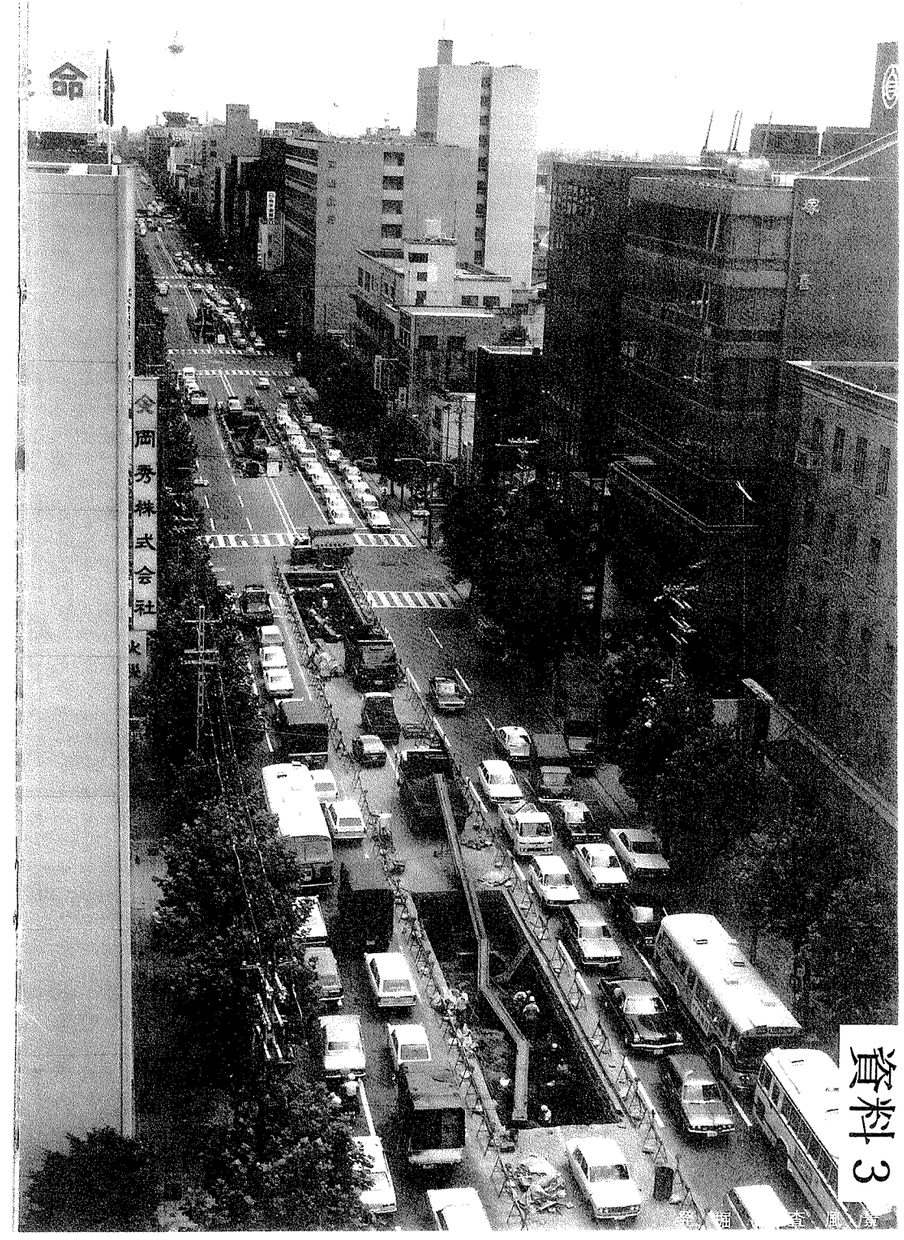
しかし、この機会を見逃し、平安京の歴史を烏有に帰せしめることはできないという、研究者や市民の熱意は強く、そうした触発された世論に支えられ、いままで全国に例をみない幹線道路上の発掘調査を行なうことになった。このような背景のもとに設立されたのが京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会である。

調査会は、京都市交通局からの委託による調査研究事業を目的として昭和49年1 月16日発足した。発掘調査の計画、および実施にあたっては、調査会にもうけられた理事会の議決、考古学専門委員会の指導を受けている。調査にかかわる事務の執行は、市交通局内に設けられた調査会事務局が担当した。理事会を構成する学識経験者の理事は次のとおりである。

会　長	村田治郎	京大名誉教授	建築学
副会長	福山敏男	西日本工大教授	建築史
	石田志郎	京大助教授	地質学
	上田正昭	京大教授	日本史
	上田　篤	京大助教授	都市計画
	☆ 木村捷三郎	京都市埋蔵文化財研究所資料部長	考古学
	☆ 杉山信三	近畿大教授	建築史・考古学
	関口鉄太郎	京大名誉教授	庭園
	☆ 田辺昭三	奈良大助教授	考古学
	☆ 田中　琢	奈良国立文化財研究所　埋蔵文化財センター研究指導部長	考古学
	☆ 角田文衛	平安博物館々長	考古学
	西川幸治	京大助教授	都市史
	林屋辰三郎	京大教授	日本史
	☆ 樋口隆康	京大教授	考古学
	藤岡謙二郎	京大教授	歴史地理学

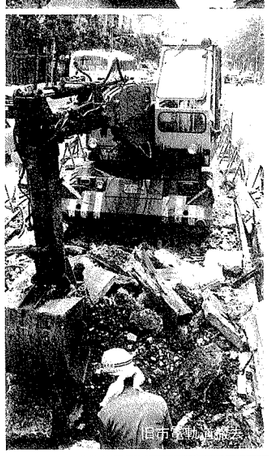
（☆印は考古学専門委員）

また、調査の円滑をはかるため、行政機関の職員も行政関係理事として参加している。



資料3

アスファルトの除去


旧市電軌道撤去

調査の方法

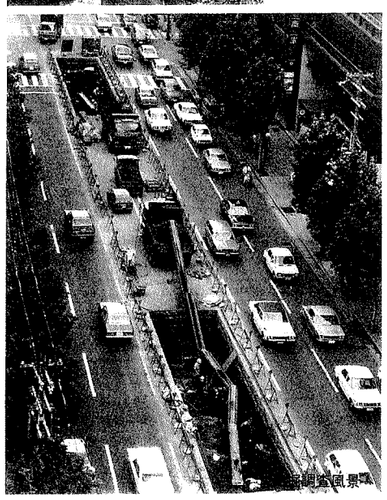
烏丸線内の遺跡調査は、典型的な都市遺跡の調査である。田園や山野で行なう発掘調査のようなわけにはいかない。発掘調査に道路工事が伴なっている。

まず発掘調査を始めるにあたって、調査区域を含むかなりの面積を調査のための占用区域として安全柵で明示する。そしてその安全柵には、赤色点滅灯をつけて、夜間の交通・安全対策にそなえる。

堀削作業は、アスファルトを除去する作業から始まり、その次に市電の旧軌道を機械力をつかって撤去することになる。これらの作業は道路工事と全く同じである。

こうした作業の後、本格的な発掘調査にはいる。発掘調査の進行で、一般的な調査と違う点は、調査によって生じた排土は、道路占用区域に置けないため、トラックで、調査占用区域外に搬出することである。また調査の進行状態によっては、調査区域の壁面が崩壊するのを防ぐために、方形のH鋼枠を使用して、鋼矢板を支え、調査の安全をはかる場合もある。

発掘調査が終了しても、烏丸線の遺跡調査の場合は、路面の復旧工事が残っている。山砂、砕石によって埋め戻され、アスファルトがひかれ、道路が完全に復旧されて、初めて調査が完了したことになる。


発掘調査風景

発掘調査風景

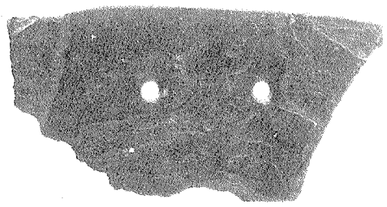
弥生土器の出土

四条烏丸付近は、弥生時代の遺跡である。穀物の穂をつみとる道具である石包丁が出土している。土坑状の遺構からは、多数の土器が発見され、その種類には壺、甕、高杯、器台等がある。琵琶湖地方の影響を受けたものが多く、この土器は弥生時代終末期のものである。

京都盆地内部の地形は、もともと起伏に富んでいたとみえ、鴨川の氾濫によって生じた自然提防の高みには、弥生時代の集落が営まれていたのであろう。

今後平安京関係の調査が進み、こうした資料が増えれば、平安京の歴史を弥生時代までさかのぼって記述することも可能である。

弥生土器出土状態


石包丁

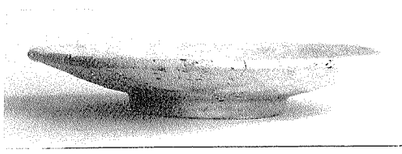
弥生土器

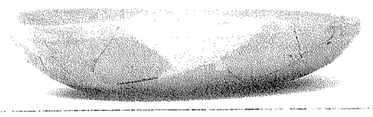
推定一条大路の調査

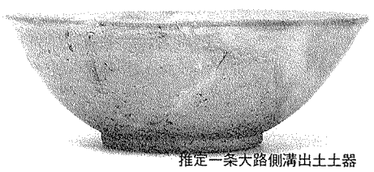
平安京は、碁盤目状に町割りされている。一条大路は、その町割りの北限、平安京の北端を東西方向に走る大路である。この大路の位置がわかれば、文献資料や今までの発掘調査の成果を活用することによって、平安京の現在位置が明確になるはずである。一条大路の発掘調査が重要な課題となっている所以である。

この一条大路を追及して発掘調査を行ない、現在の一条通り中央から北へ28mの地点で東西方向に延びる溝を発見した。溝幅は2m、深さ0.3mで、素掘りの溝であった。溝内には、平安時代後期の土器のみが埋っていた。そのなかには緑釉陶片や、土師器、須恵器等がある。溝は位置的にみて一条大路北側側溝の可能性が強く、注目された。

緑釉陶片



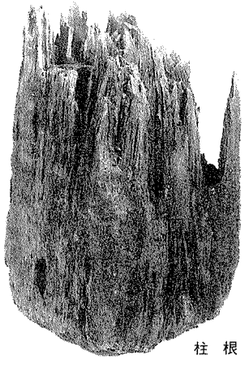



推定一条大路側溝出土土器

推定七条坊門小路の調査

東本願寺前で、条坊復元図に照らし合わせると、七条坊門小路の側溝と考えられる溝を発見した。溝は推定一条大路の側溝と同様素掘りで、平安時代末から鎌倉時代の土器が出土した。溝は、時期を違えてつくりかえられており、路面と思われる部分は、非常に固いフラットな面をなしていた。七条坊門小路の一部であると推測されるが、確実なものにする為に、今後隣接地点での調査が必要である。

緑釉高杯と埦


柱根

推定一条大路北側側溝

推定中院の調査

政治の舞台は、平安後期になると内裏中心から現在の六条付近に移り、小六条院、六条中院、六条院といった白河上皇による院政の中心となった建物が並び、院庁街としての景観を呈していた。この六条中院東端部推定位置（烏丸的場上ル）より、平安後期の瓦が大量に発見された。瓦当だけでも 250 点を越え、ほとんどの瓦が火を受けた形跡を残していた。瓦の他に焼土、焼石が混っており、それは、至近距離に火事に遭った建物があることを如実に示している。

遺構としては、平安時代末期の井戸が三基検出され、多くの土師器・須恵器・陶磁片が出土した。陶磁器には中国製の合子も発見されている。三基とも井戸は円形の掘方を有する方形木枠組の井戸であった。木枠は一辺0.65 m を測った。

出土した瓦の文様は多様で、軒丸瓦には巴文系、蓮弁系があり、軒平瓦には剣頭文系、唐草文系、巴文系の瓦当が出土している。同笵の瓦当をもつものも多い。京都で生産した瓦が大半を占めるが、なかには地方から搬入された瓦もみられる。今後、地方の瓦生産地が明らかになるにしたがって、地方と京都の関係を知る格好の資料としても評価されよう。またこの瓦が大量に出土した地点より西側で調査をすれば、建物の跡が発見される可能性も強く、今後の調査に期待される部分も多い。

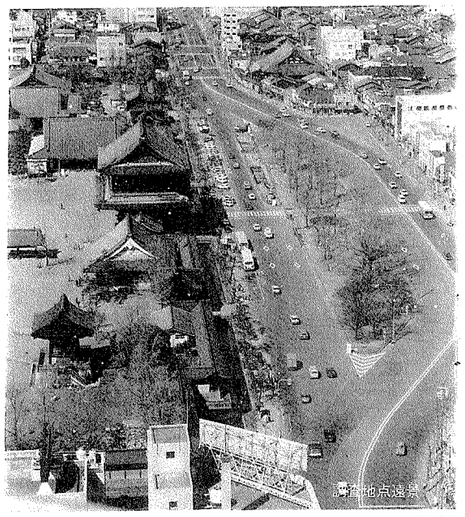
瓦・井戸検出状況

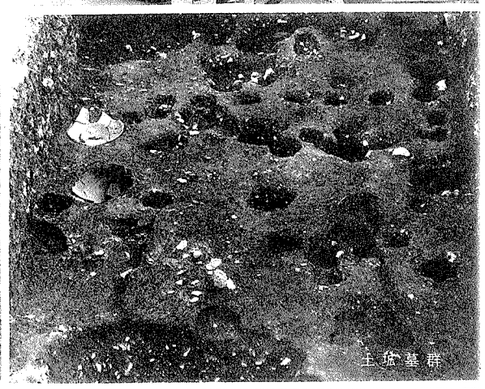
軒丸瓦

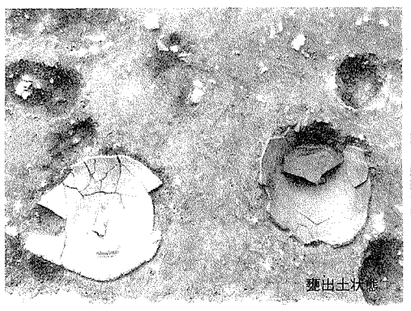
軒平瓦

中世墓址の調査

東本願寺前で調査した推定七条坊門小路側溝をはさんで、北・南側からおびただしい数の土坑が発見され、土坑の中には大量の土師質の皿が投げ込まれていた。なかには、埋納したような状態で皿が何枚も重なって出土した例もある。骨壺としての機能を持った須恵質のスリ鉢や瓦器の鍋、常滑系の甕も発見されている。このように骨壺として使用されていた容器の種類は多彩である。瓦器の花瓶、数珠玉等、葬送の儀に使用されたと考えられる遺物も出土している。東本願寺前のこの地域は墓址で、この墓址はおそらく、庶民の墓場であったのであろう。今のところ鎌倉時代から室町時代を通じて営なまれていたと考えている。


調査地点遠景


土師墓群

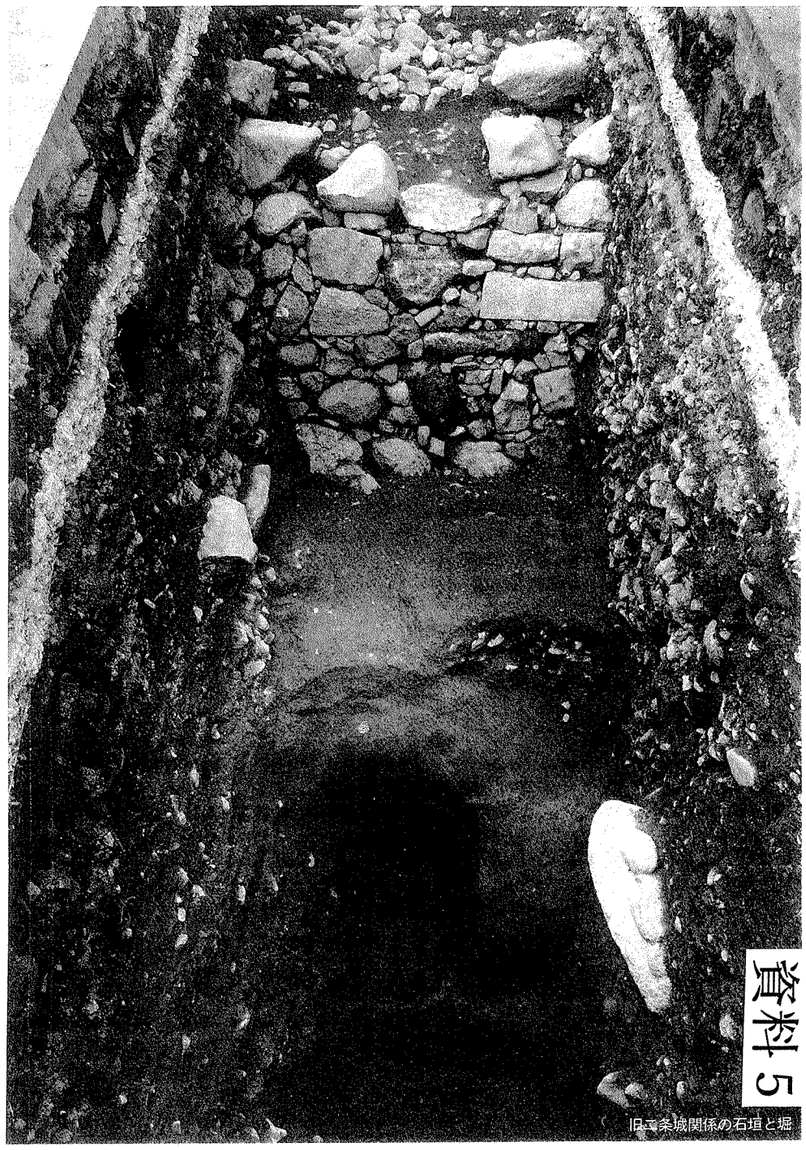

甕出土状態

埋納土状態

土坑

土坑

旧二条城関係の調査


旧二条城関係の石垣と堀

資料 5

旧二条城関係の遺跡調査

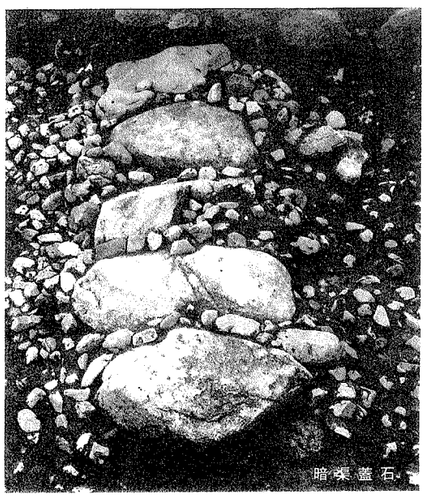
旧二条城は、入洛をはたした織田信長が、その翌年、永禄12年（1569年）に将軍足利義昭の居城として造営したものである。その範囲は、ほぼ現在の烏丸通り、新町通り、丸太町通り、下立売通りに囲まれた二町(約240ｍ）四方とされている。この旧二条城の造営については、ポルトガルの宣教師ルイス・フロイスが本国に送った書簡のなかで詳しく述べている。

その記載によれば、工事のためには「通常二万五千人、少なきとも一万五千人これに従事」、信長自身も「工夫長」として鍬をとり、杖で指揮し、また石材がないため「石材に石仏や石壇までも徴発、……、多数の石像を倒し、頸に縄をつけて工事場に引かしめたれば、都の人は異常の恐怖をいだきたり」と書かれている。

これまで、石仏や石壇を使用した石垣を数ケ所で発見しており、この記載と合致するところが多い。烏丸椹木町では南面する石垣、犬走り、堀を検出し、約26ｍの掘幅も確認している。それより約2町北にあたる烏丸出水では暗渠が堀につながっていた。これらの遺構の石垣の石材は、石造物が多数転用され、その種類は、石仏、板碑、五輪塔、礎石、建築用材等多岐にわたっている。現在までこうした石垣に使用された石造物は 130体以上の 出土をみており、板碑、五輪塔には年号が刻まれているものもある。

なお、最も良好な状態で残っていた南面する椹木町上ルの石垣は、そのまま現地保存されることになっている。

北面する石垣



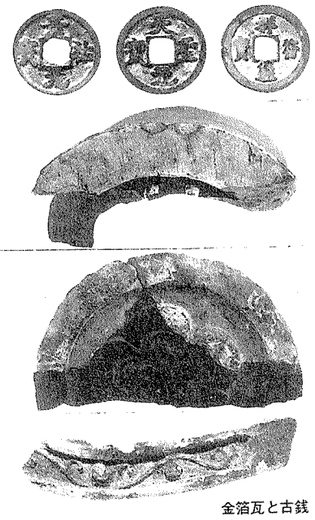
暗渠蓋石

暗渠開口

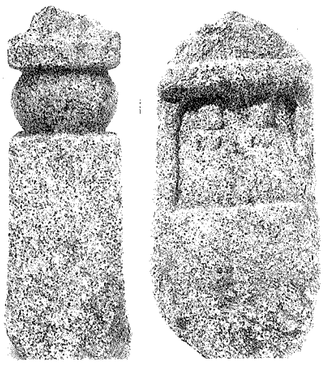
旧二条城関係の調査による出土遺物

旧二条城関係の堀、及び石垣溝から多数の遺物が出土している。土器には、白磁、青磁、明代の染付などの外来陶磁器、常滑系の甕、備前、信楽のスリ鉢、瀬戸天目椀等、国産の陶磁器、及び土師器、須恵器、瓦器、緑釉、灰釉陶器片等がある。木製品も多く、漆器、箸、位牌、曲物、下駄等がある。瓦も多く出土しているが、その中には金箔瓦がある。同時代の土坑の中から織田氏の家紋と一致する五葉の木瓜紋を持つ金箔瓦が出土しており、信長との関連を考える上で興味深い。その他、宋銭、きせる等も出土している。

出土土器



金箔瓦と古銭



石仏と五輪塔

旧二条城関係の調査による出土石造物

資料6

平安京跡発掘略年表－４

年代	調査研究	行政	普及啓発
昭和44年（1969）	２月、発掘で、内裏内郭回廊の南西部を検出（文2-10）。	坂東善平氏、有志10人と連名で「平安京内で行われた土木工事による遺物出土表」を添え「平安京保存の要望書」行政官庁に提出（文2-63）。	３月、平安博物館の建物、国の重要文化財に指定（文2-60）。
	４月、木村捷三郎、平安中期瓦の考察を行う（文2-65）。		
	５～６月、三条西殿跡の発掘が行われ、三条大路、烏丸小路の街路側溝を検出（文2-14）。	10月、日本考古学協会大会（平安博物館）に「協会解体」を訴え学生乱入（文2-62）。	
昭和45年（1970）		３月、関係官庁、地下鉄建設に伴う埋蔵文化財調査について協議を始める（文2-69）。	10月、京都国立博物館「京の古瓦特別展」に坂東蔵品の瓦が出品される（文2-68）。
		４月、京都市文化観光局に文化財保護課が誕生（文2-57）。	
昭和46年（1971）	２月、学生がチームをつくり、本山、幡枝地区の分布調査を行い報告する（文3-159）。	４月、京都市文化財保護課に埋蔵文化財技師が就任（文3-144）。	12月、日本考古学協会、『埋蔵文化財白書』を公刊（文3-142）。
	９～10月、（財）古代学協会、下水敷設の立会で、延禄堂・修式堂の延石列を検出（文3-1）。	10月、京都市文化財保護課、地下鉄建設に伴う埋蔵文化財調査の計画案を提出（文3-147）。	
		11月、「建設省がおこなう道路事業の建設工事に伴う埋蔵文化財の取扱いについて」が、文化庁から各都道府県教育委員会に通知。発掘調査費、整理保存費負担は建設省側になる（文3-143）。	
昭和47年（1972）	１～２月、創建時と思われる東寺築地基壇を確認（文3-17）。	２月、京都市文化観光資源調査会が設立される（文3-145）。	
	２月、京都市、羅城門跡を発掘し、軒瓦１点出土（文3-46）。	３月、「京都府遺跡地図」が刊行される（文3-144）。	
	３月、二条保育園敷地内で緑釉瓦を多く伴う瓦溜を検出（文3-2）。	５月、山陰線高架化に伴う埋蔵文化財発掘調査会が設立され調査団を組む（文3-146）。	
	５月、左京少将井遺跡の発掘を始める（文3-18）。	この頃、民間の原因者負担の発掘が盛んとなる。	
	11～12月、西寺跡から古墳時代の土器出土（文3-42）。	７月、山陰線高架工事に伴う平安京跡の調査が始まる。京都市の公共事業を対象に調査が実施された最初の調査となる（文3-49）。	
		11月、京都市遺跡地図が公刊され、平安京全域が埋蔵文化財包蔵地となる（文3-140）。	

平安京跡発掘略年表－５

年代	調査研究	行政	普及啓発
昭和48年（1973）	２～３月、平安京調査会が初めて発掘を行い、平安初期の整地層、井戸を検出（文3-117）。	２月、田辺昭三氏を代表にして平安京調査会が発足（文3-149）。	10月、京都会館会議場で、「烏丸通の埋蔵文化財について」の公開講演会、説明会を開催（文3-147）。
	３月、（財）古代学協会、三条西殿の東北部を発掘、中世の土壙、井戸、柱穴等を検出（文3-21）。	３月、京都市、平安京跡に対する保護、調査の基本構想を発表する（文3-148）。	
	３月、近藤喬一、西賀茂・東幡枝の瓦窯出土の文字瓦と平安宮跡出土瓦をあげ、盛行年代を考定（文3-161）。	４月、森浩一、平安京跡の開発による破壊が進んでいる実情を訴える（文3-157）。	
	３～４月、同志社大学、南蛮寺跡発掘。石製硯裏面にキリスト教儀式を表わす人物線画、桃山陶磁器など多量出土（文3-134）。	４月、大石良材、開発に対処のため平安宮の復原案を作る（文3-155）。	
	４月、平安宮東南限の隍を発見したとする。この頃、文化財保護課が直接、平安宮跡調査（文3-27）。	７月、京都府教育委員会から「土木事業の実施に伴う埋蔵文化財等の取扱いについて」の要綱を関係機関に通達（文3-143）。	
	７～12月、左京内膳町遺跡で、弥生前期の土器、石器が初めて出土する（文3-48）。	10月、伊藤玄三、重要な平安京跡の遺構は保存され活用されることが望ましいと述べる（文3-154）。	
	８月、内裏内郭回廊の基壇が発見され、西側が27ｍ以上続くことを確認（文3-8）。	12月、京都市、設立準備会で京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会の設置を決める（文3-147）。	
	９～10月、（財）古代学協会、民部省の築地跡を検出（文3-9）。	12月、浪貝毅、京都市の埋蔵文化財行政の経過と実情を述べる（文3-156）。	
	10～12月、平安京調査会、朱雀院跡で平安前期の掘立柱建物を検出する（文3-122）。		
	12月、六勝寺研究会、一条大路関連の発掘を行う。この頃、六勝寺研究会が活躍する（文3-131）。		
昭和49年（1974）	５月、永田信一　平安京跡の遺跡パトロール、立会調査の必要性を述べる（文3-117）。	１月、京都市交通局から委託され、京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会が発足する（文3-147）。	４月、埋蔵文化財速報と資料紹介を掲載する目的で『京都考古』第１号を発刊（文3-168）。
	６月、地下鉄烏丸線の試掘が開始され、弥生末期の土器が出土。烏丸綾小路遺跡発見の契機（文3-50）。	５月、林屋辰三郎、地下鉄烏丸線の発掘に対して平安京解明に大きな期待があると述べる（文3-172）。	
	７～11月、平安京調査会、左京四条一坊で大規模発掘を開始。四条坊門小路、平安～室町の遺構多数検出。平安後期の井戸から寛治五年の墨書土器、前期の井戸から「秋野方」と墨書する木製人形出土。（文3-118）。	８月、京都市遺跡地図が改訂される（文3-141）。	
		８月、京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会第４回理事会で、試掘の経過報告が行われる（文3-158）。	

平安京跡発掘略年表－６

年代	調査研究	行政	普及啓発
昭和49年（1974）	７～翌年９月、鳥羽離宮跡調査研究所、右京の大規模発掘を始め、木辻大路と土御門大路の交差点部を検出する。北辺近くの街路検出で、2500分の1地図上の条坊復原の精度が高まる（文3-128）。	９月、地下鉄烏丸線のトレンチによる発掘が開始される（文3-158）。	
		11月、田辺昭三、烏丸通の地下には試掘の結果遺跡が良好に認められ、都市遺跡の調査法を確立することが重要と主張（文3-174）。	
	７～９月、平安後期の蘭林坊東南隅の築地を検出（文3-13）。	11月、地下鉄高速鉄道烏丸線の起工式が京都会館で行われる（文3-175）。	
	11～翌年５月、六角堂跡の発掘が行われ、中・近世の土器、陶磁器が多量出土（文3-22）。		
	12～翌年１月、平安宮中和院跡から針金状の純板金（金糸）が出土する（文3-33）。		
昭和50年（1975）	２～３月、旧二条城濠の南面石垣が検出される（文3-63）。	10月、文化財保護法が一部改正される（文3-144）。	２月、龍谷大学大宮学舎敷地で、平安後期の井戸、室町の井戸を検出。現地説明会を行う（文3-173）。
	８～11月、平安中期の西大宮大路側溝、路面が検出され、牛のひずめ跡や車の轍跡が検出される（文3-123）。	10月、田辺昭三、平安京内はすべて調査対象とすべき。点に近い遺跡の幾つかを線につなぎ、更に線と線を合わせ面の認識に発展させるべき。それには記録上の原点になる測量基準点を定める必要があると主張する（文3-118）。	４～５月、現二条城内で『古京展－飛鳥から平安まで』が開催される（文3-169）。
			６～７月、特別展観「日本出土の中国陶磁」が、東京国立博物館で開催され、平安京跡出土の中国陶磁も展示される（文3-170）。
昭和51年（1976）	１～３月、地下鉄烏丸線の調査で、東本願寺前が中世の墓跡であることがわかる（文3-90）。	３月、梶川敏夫・浪貝毅、平安京内の遺跡状況から京都盆地の発掘では全時代を把握できる調査が必要と主張（文3-35）。	10月、『京都の歴史』全10巻の発刊が完了する（文3-171）。
	４月、豊楽院の正殿である豊楽殿の基壇の一部と柱跡の根固め石を検出する（文3-40）。	11月、平安京調査会、鳥羽離宮跡調査研究所、六勝寺研究会の３団体が母体となって、（財）京都市埋蔵文化財研究所が設立される（文3-152）。	
		12月、京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会、覆工板下で発掘調査を始める（文3-176）。	
昭和52年（1977）	４～７月、左京高倉宮・曇華院跡を発掘。建物跡、石組、石垣など検出（文3-163）。	３月、田中琢・田辺昭三、平安京跡発掘調査記録は、絶対位置の記録が欠け、国土直角座標系に結び付く記録方式を採用し改善することが重要と主張（文4-184）。	４月、現二条城内に、烏丸通下立売上ルで検出した旧二条城の石垣の移築作業を行う（文4-179）。
	12月、東寺境内の発掘調査を進める（文3-174）。		11月、（財）京都市埋蔵文化財研究所設立１周年記念事業として文化財講演会が開催される。これ以後毎年秋開催（文4-187）。
昭和53年（1978）	１月、西寺跡で、大型の井戸の木枠を検出（文3-112）。	公共建物の屋上に京都市遺跡測量基準点が設置される。遺跡の位置の記録が国土座標によって行われるようになる（文4-185）。	（財）京都市埋蔵文化財研究所、保存処理専用施設を下鳥羽に開設する（文4-186）。
	２月、平安宮左兵衛府跡で、和歌を墨書した土師器片が出土（文4-48）。		５月、平安宮造酒司の倉庫跡検出、現地説明会が行われる（文4-189）。

平安京跡発掘略年表－７

年代	調査研究	行政	普及啓発
昭和53年（1978）	２～12月、左京北辺三坊六町・内膳町遺跡の発掘で、「慶長九年」銘の付札出土（文4-170）。	３月、京都市埋蔵文化財センター等の施設整備費予算が市議会で議決され、考古資料館の建設が決定する（文4-177）。	11月、『シンポジュウム平安京～平安京調査と現状を語り展望をひらく会－』京都市・（財）京都市埋蔵文化財研究所主催（文4-188）。
昭和54年（1979）	３月、八賀晋、古代都城の占地を地形的環境から都城の占地を分析。平安京は東堀川、西堀川とも水量確保と運河造成の容易さを考慮した谷地形に基本をおくと指摘（文4-200）。	３月、田辺昭三、昭和51年度の開発ペースでいけば、わずか52年で平安京跡が完全消滅するという試算を報告（文4-178）。	平安宮内裏内郭回廊跡を史跡指定（文4-193）。
			３月、パンフレット『埋もれた京都－地下鉄烏丸線の遺跡調査－』を刊行（文4-211）。
	７～９月、京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会、面積78平方メートルを58日間かけて手掘りで発掘調査を実施。各時期の生活面をおさえ、20面におよぶ調査記録。平安前期から現代まで遺構を検出（文4-31）。	11月、（財）京都市埋蔵文化財研究所が現在地（上京区今出川大宮東入る元伊佐町265）に移転（文4-177）。	３月、西寺東回廊跡の現地説明会が開催される（文4-119）。
			10月、日本貿易陶磁学会が発足する（文4-202）。
			11月、京都市考古資料館が開館する（文4-177）。
	９～11月、室町第（花の御所）から釉裏紅盤片が出土（文4-33）。		
昭和55年（1980）	１月、内裏内郭回廊の凝灰岩板石で造られた東側溝検出（文4-81）。	１月、京都市高速鉄道烏丸線内遺跡の発掘調査が終了する（文4-179）。	３月、『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ』が発刊される（文4-208）。
	５月、右京二条二坊で、縄文早期の押型文深鉢片が出土する（文4-108）。	４月、文化観光局内に京都市埋蔵文化財調査センターが新設される（文4-180）。	５～６月、京都御苑内に烏丸通丸太町上ルで検出された旧二条城の石垣が移築される（文4-179）。
	10月、右京五条二坊で平安前期から後期に続く西堀川小路東側を検出。堀川小路幅は８丈と確定（文4-131）。	10月、京都市の遺跡地図が改訂される（文4-181）。	８月、京都市考古資料館、第１回小・中学生夏期教室を開催。以後毎年８月開催（文4-191）。
		11月、調査・研究は（財）京都市埋蔵文化財研究所が、保護は京都市埋蔵文化財調査センターが、文化財保護思想の普及啓発は京都市考古資料館が、中心となって３者は有機的に結合すべきと主張（文4-182）。	９月、第１回日本貿易陶磁研究集会が同志社大学で開催される。京都出土の輸入陶磁器についての研究発表（文4-203）。
			10月、（財）京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘資料選』を発刊する（文4-206）。
昭和56年（1981）		４月、（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター設立（文序-1）。	
		10月、京都市文化財保護条例が公布される。京都市文化観光資源調査会は「京都市文化財保護審議会」になる（文序-2）。	